

日本漢字音史から見た法華経 (要旨)

肥 爪 周 二*

日本漢字音は、古代において、中国語から借用された「外来語」音である。したがって、その受容の経緯は、西洋語由来の外来語受容の場合と、共通する面がある。

英語の場合、初期の段階には、「ミシン」「プリン」「ステーキ」などの多様な聞き為しが行われ、その一部は現代にも残存しているものの、時代が下るにつれ、原語の(生の発音というよりも)綴りや発音記号を参考に、機械的に語形が整えられていった。

漢字音の場合も同様で、平安初期訓点資料の漢字音(呉音系字音)の仮名表記法は、後世のものとは異なる部分がある。典型的なのは、拗音のア行表記(歴リアク・壤ニアウ・捨シア)、n韻尾の二表記(戦セニ・猿エニ・栗ナニ)、イ表記(遣ケイ・損ソイ・煩ホイ)、零表記(難ナ・倫リ・辰シ)などである。

この平安初期の仮名表記の特徴は、漢文訓読の世界では継承されなかったが、n韻尾の表記などは、平安・鎌倉時代の平仮名文献の世界には遅くまで残った(平仮名文献でも、時代が下るにつれて、整えられた漢字音を使用するようになる)。

これは、仏教界における字音学習の場においては、(英語の場合とは異なり)原語との接触が断たれていたにも関わらず、音形の整理・調整が行われたことを意味する。具体的には、漢音系字音の音形を参考に、形が整えられていったと考えられるが、ある時期以降、反切による字音表示から、仮名表記へと転じていった漢音系字音も、既存の漢字音である呉音系字音の音形の影響を受けたという面がある。

こうした呉音系字音の学習・整理の中心にあっ

たのが、法華経字音学であった。

呉音系字音の研究において、法華経読誦音が重用されてきたのには理由がある。ある系統(明覚系)の法華経音義は、法華経に出てくるすべての単字を見出しとして掲出し、それらに音と義(訓)を付したものであり、通常の音義では取り上げられないような、ごく平易な漢字にまで、呉音系字音の情報が得られるという、きわめて使い勝手の良いものだからである。

・法華経読誦音資料の長所

- ① 法華経音義は、出現漢字を網羅的に掲載。
- ② 早くから注釈・索引が充実していたため、文脈の確認が容易。
- ③ 伝統的な法華経字音学の成果を、漢字音研究の指標として利用できる。

・法華経読誦音資料の弱点。

- ① 法華経本文に出てこない漢字(元・緑・絵・豆など)。
- ② 音訳字としてしか使用されていない漢字(底・羅・弥・駄など)。
- ③ 複数音・複数声調を持つ漢字の整理が中途半端。

鎌倉時代の『韻鏡』の輸入により、漢字音研究は、日本漢字音の側から出発するのではなく、中国語の音韻体系を基準に整理するのが主流になる。法華経字音学も、等韻学の研究成果を取り込んだものが出てくる(日遠『法華経随音句』など)。

そして、明覚流の独自の音分類は結果的に停滞することになり、日本漢字音の形を基準にした分析から見えてくる諸問題に注意が払われなくなるという弊害も出てくることになった。

* 東京大学准教授